九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

職只太子賓客 : 唐名と白楽天

木戸, 裕子
鹿児島県立短期大学

https://doi.org/10.15017/19775

出版情報：語文研究. 108/109, pp.1-13, 2010-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

職只太子賓客

――唐名と白楽天――

木戸裕子

但し、花に遇ひて栄耀少なく
　　水に対ひて沈淪を耻づる者あり
位は纔かに正議大夫　青紫を隔てて命薄し
職は只だ太子賓客　黄綺に亜ぎて齢傾きぬ
誤りて唱首と為り　時人に何をか謂はんと爾か云ふ
「七言三月三日侍左相府曲水宴同賦因流汎酒応教詩一首」
（『江吏部集』巻上・『本朝文粋』巻八）

一条朝の儒者大江匡衡は寛弘四年（一〇〇七）、左大臣藤原道長の上東門第で行われた曲水宴の序者となった。[注1] 右は、その詩序の最後、いわゆる自謙句の部分である。

ここで匡衡は自らのことを「位は纔かに正議大夫」「職は只だ太子賓客」とのべる。匡衡は本詩序を作った寛弘四年には五十六歳、その四年前の長保五年（一〇〇三）に正四位下に昇り、寛弘三年には息子挙周を式部丞にするために式部権大輔の職を辞しており、身に帯びる官は十年前の長徳三年（九九七）に補せられた東宮学士のみであった。『拾芥抄』によれば、正義大夫は正四位の唐名であり、[注2] 太子賓客は東宮学士の唐名である。

本稿は、この東宮学士の唐名、「太子賓客」が特に匡衡にとっていかなる意味を持つのか、考察するものである。

一

まず、東宮学士の唐名を『二中歴』と『拾芥抄』によって確認しておく。[注3]

『二中歴』　第七　官名歴

東宮　　学士　　太子文学　崇文館　大学函中
　　太子賓客　少師　少傅　少保

『拾芥抄』中　官位唐名部

東宮傅……学士　　小師　小傅　小保　太子文学　文館大学士
　　崇文館大学士　今号太子賓客

鎌倉末成立の『二中歴』と南北朝成立の『拾芥抄』で若干の異同はあるが、どちらも七つの唐名を挙げる。

しかしながら、現存する平安朝漢詩文を索引類、データベース類で検索すると[注4]、右の唐名のうち実際に使われているものは匡衡の詩序中に見える「太子賓客」二例のみである。一つは冒頭にあげた寛弘四年の藤原道長の上東門第での曲水宴詩序であり、もう一例は長保二年（一〇〇〇）の皇太子居貞親王（三条天皇）の第一皇子敦明親王の誕生時の読書初めにおける詩序の末尾である。

①　但遇花少栄耀　　対水耻沈淪者
　　位纔正議大夫　　隔青紫而命薄
　　職只太子賓客　　亜黄綺而齢傾

誤為唱首謂時人何云爾

「七言三月三日侍左相府曲水宴同賦因流汎酒応教詩一首」

（『江吏部集』巻上・『本朝文粋』巻八）

②　于時　冠蓋如雲糸竹終日
　　旨酒之薦聖賢　　味以招揺之桂
　　芳饌之尽水陸　　加以崑崙之萍
　　播徳音於楽章　　還嘲漢室重輪之月
　　得扶翼於戚里　　誰招商山四皓之霜
　　匡衡　以太子賓客　　忝列敬師之初筵
　　以翰林主人　　敢記崇学之盛事云爾

「七言冬日陪東宮聴第一皇孫初読御註孝経応令一首」

（『江吏部集』巻中・『本朝文粋』巻九）

①の詩序の自謙句は実は菅原文時の詩序「秋日聴第八皇子始読御注孝経」（『本朝文粋』巻第九）の自謙句に倣ったものである。文時の詩序では「位纔正議大夫、官猶員外吏部。染学而老、倦朝而衰」とあり、老いてなお期待通りの官位に付けないことを嘆くという内容も含めて①の句の粉本となっているが、文時の官は員外吏部、すなわち式部権大輔であって、東宮学士ではない。

②の時匡衡は式部権大輔で、東宮学士と文章博士を兼ねていたが、末尾で名乗るのは「太子賓客」すなわち東宮学士と「翰林主人」すなわち文章博士の二官である。これは本詩序が匡衡が東宮学士として仕えた皇太子居貞親王の第一皇子の読書初めの際のものであるからであろう。

また、「太子賓客」という完全な形ではないが、匡衡にはもう一例、東宮学士を賓客と称した例が見える。

③　東海為使君　北闕為侍臣　東宮為賓客　北堂為主人
李部為大卿　芸閣為別当　一身兼六事者古今所未聞也……

長保三年三月三日　尾張守大江朝臣匡衡
「奉行成状」（『本朝文粋』巻七）

この書状は、長保三年、念願の尾張守となった匡衡が、着任の喜びを尾張から都の藤原行成に送ったものである。匡衡は尾張守を含め一身に六事を兼ねることを誇るが、そのうち東宮学士であることを「東宮には賓客為り」と述べる。これは「太子賓客」をふまえた表現である。

以上、右に揚げた三例はいずれも、詩序や書状の本文中にあって匡衡自身の東宮学士の職を指すものである。

これら三例以外に、『本朝文粋』中には、匡衡が自身の官について唐名ではなく正式名称の「東宮学士」と記した例が以下に挙げるように五例ある。

④　正五位下行式部権少輔兼東宮学士文章博士越前権守大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言
本文略
長徳三年七月廿日正五位下行式部少輔兼東宮学士文章博士越前権守大江朝臣匡衡
「請特蒙天裁召問諸儒決是非今月十七日文章生試判違例不穏雑事状」（巻第七　大江匡衡）

⑤　正五位下行式部権少輔兼東宮学士文章博士越前権守大江朝臣匡衡解申進申文事
「請重蒙天裁弁定大内記紀斉明称有病累瑕瑾所難学生大江時棟奉試詩状」（巻第七　大江匡衡）

⑥　但春宮大進・東宮学士、同時為美濃尾張之守。古今希有之事也。

「報頼光書」（巻第七　大江匡衡）

⑦　某式部権大輔・昇殿侍読・東宮学士・尾張守、是殿下吹挙之力也。

「可被上啓挙周明春所望事」（巻第七　大江匡衡）

⑧　国宰正四位下行式部権大輔兼東宮学士大介大江朝臣匡衡、稽首例足

本文略

寛弘元年十月十四日正四位下行式部権大輔兼春宮学士大江朝臣匡衡

「於尾張国熱田神社供養大般若経願文」（巻第十三　大江匡衡）

これらのうち④、⑤、⑧の三例は本文ではなく、匡衡自身の署名の部分である。⑥、⑦は書状の例だが、⑥では源頼光と匡衡がともに皇太子居貞親王に仕える春宮大進と東宮学士であって、かつ美濃国と尾張国という隣同士の国守に任ぜられたことを前例のないことと述べており、⑦も自身が四官を兼任していることを例を見ない特別なこととする例である。官職についての唐名と正式呼称の使い分けについては、工藤重矩「平安朝における官職唐名の文学的側面」（『平安朝和歌漢詩文新考　継承と批判』風間書房）に

申文でも、申請者の官位と申請する官職とは省略なしの完全な正式呼称で、経歴や前例などを記す部分は原則として正式呼称であるが、心情を吐露して訴える部分では唐名を用いることがある。

とあるが、これら五例もすべてこの記述に一致する。『本朝文粋』にはあと一例、匡衡についての「東宮学士」の用例がある。

⑨　式部大輔・文章博士・東宮学士・位昇四品、身師一人。

「返納貞観政要十巻返事」（巻第七　藤原行成）

⑨は匡衡の作ではないが、彼が書状を送った藤原行成からの返書であり、匡衡の経歴を記す部分である。

以上は、『江吏部集』『本朝文粋』中の匡衡自身の官職「東宮学士」の正式呼称と唐名の使い分けの例である。東宮学士の唐名「太子賓客」の使用例は、他の官職の正式呼称と唐名の使い分けと同様であるように見えるが、匡衡にとって、東宮学士の唐名「太子賓客」は以下に考察するとおり、特別なものであった。

二

匡衡の詩文中には自身以外の東宮学士を指す例が三例存するが、三例ともに「太子賓客」以外の語が使われる。

⑩　策家居内官兼受領例

文章博士菅原是善兼伊予守

式部少輔大江音人兼丹波守

東宮学士高階成忠兼大和守

「請殊蒙天恩依検非違使労兼任越前尾張等国守闕状」

（巻第六　大江匡衡）

⑪　冬日侍飛香舎聴第一皇子初読御註孝経応製詩一首

（『江吏部集』巻中・『本朝麗藻』巻下）

呂望授来文武学

桓栄独遇漢明時

幸伝延喜明時例

天子儲皇皇子師

〔延喜聖代祖父為天子師為東宮学士。兼復授十一皇子。其皇子即天暦聖主也。誇之漢家。本朝未有此比。今日有感故献此句〕

⑫　早夏諸客賀予再兼翰林不堪情感聊不一絶〔付小序〕

（『江吏部集』巻中）

予今年　正月拝尾州刺史　三月兼翰林主人

蓋聖上好文　賢相重詩之所致也

於是　賀州源刺史青宮菅学士　枉華軒与門生四五輩

来　賀恩之深也

※青宮菅学士は菅原宣義　三条天皇東宮学士、文時孫

以上三例のうち、⑩と⑪は、⑩が申文の中で自身が申請している受領職の前例として高階成忠の官職を挙げている部分、⑪が詩の自注で祖父維時卿が侍読と東宮学士を歴任した前例を揚げる部分であり、この二つは正式名称を用いている。

それに対して⑫は詩序中の例で、匡衡の文章博士再任祝いに来訪してくれた客をそれぞれ「賀州源刺史」、「青宮菅学士」と呼んでいる。「賀州刺史」は加賀守、「青宮学士」は東宮学士である。「青宮学士」は『二中歴』や『拾芥抄』の挙げる唐名ではないが、「青宮」は東宮の唐名として挙げられている。また、匡衡自身の官職も尾張守を「尾州刺史」、文章博士を「翰林主人」と唐名で称しているので「青宮学士」を唐名として使用していると判断してよい。

本詩序は匡衡が正月に尾張守を拝し、三月に文章博士を兼

任したとあることから、寛弘六年であることが分かる。[注5]

この二人のうち賀州源刺史は特定できないが、青宮菅学士は菅原宣義である。宣義は菅原文時の孫で、前年の寛弘五年（一〇〇八）に匡衡に替わって居貞親王の東宮学士となっていた。[注6]

匡衡が詩序中で自身の東宮学士の職を「太子賓客」の唐名で称したのは既に先に挙げた①の寛弘四年と②の長保二年のことであるから、ここでも菅学士こと菅原宣義を「太子賓客」と称することも可能だった。賀州源刺史の呼称のように、間に菅を入れることが「太子賓客」の語では難しかったとしても、用例③のように「賓客」のみを唐名として使い、東宮菅賓客と呼ぶこともできたはずである。それをしなかったのは、匡衡にとって「太子賓客」とは自身の場合にだけ使う特別な唐名だったのではないか。

ここで、匡衡以外の作者による東宮学士とその唐名の使用例を見ておきたい。とはいえ、匡衡と同時代の用例は少ない。また、『平安朝漢文学総合索引』によれば、一条朝以外の漢詩文作品では東宮学士の呼称は正式呼称ばかりで唐名の用例はほとんどない。[注7]

匡衡と同時代の他の作者の用例は先に挙げた藤原行成書状の⑨以外に、『本朝麗藻』に一例がある。

⑬　所謂、左少丞菅祭酒・兵部藤侍郎・太子学士藤尚書・肥州平刺史・美州源別駕・前藤総州・李部源夕郎・慶内史・高外史是也。

「初冬感李部橘侍郎見過懐旧命飲」藤原有国（『本朝麗藻』巻下）

「太子学士」は『二中歴』『拾芥抄』には見えないが、詩題中の「李部侍郎」、詩序中の「左少丞」以下、他の官名が唐名であるのでこれも一種の唐名として使われているのであろう。太子学士藤尚書は右少弁藤原惟成、本詩序冒頭に「天元五載」とあるその天元五年（九八三）に師貞親王（花山天皇）の東宮学士となった。本詩序は円融朝の作品であり、先に挙げた匡衡の詩序よりも前の作品であるが、「太子学士」の代わりに「太子賓客」と使うことに不都合があるとは思えない。あるいは「太子賓客」は匡衡から始まる唐名なのであろうか。

三

ここで、中国、唐における「太子賓客」の職掌と典故を確

認しておきたい。

宋代の類書『太平御覧』には『唐六典』と『漢書』を引いて次のようにいう。

六典曰、太子賓客掌侍従・規諫・賛相礼儀、而先後焉。

凡皇太子有賓客、宴会則為之上歯。

漢書曰、高祖欲廃太子。呂后用張良計、致商山四皓以為賓客。又孝武帝為太子、立博望苑、以使通賓客、則其義也。

『太平御覧』巻二百四十五「職官部四十三」太子賓客

すなわち太子賓客は、太子に付き従って、諫め、礼儀をたすけることをつかさどり、その起源は、漢の高祖が太子を廃そうとした時、太子の母呂后は商山の四皓を招き賓客として太子を補佐させてその地位を守ったことによるという。

匡衡も、この商山の四皓の故事をふまえて、用例①では「黄綺に亜ぎて齢傾きぬ」すなわち、自分は四皓のうちの夏黄公と綺里季に次ぐ程の高齢となってしまったと言い、②でも「扶翼を戚里に得たれば、誰か商山四皓の霜を招かん」すなわち、第一皇孫には外戚藤原一族の助けがあるのだから、その地位を守るためにわざわざ商山から四人の白髪の老人を招く必要はないと言うのである。冒頭で述べたように、①の詩序の時点で匡衡は五十六歳、「黄綺に亜ぎて」は聊か大仰であるが、匡衡はこのころ体の不調を覚えており、この五年後には他界することを勘案すれば、単なる修辞を越えた実感であったことだろう。②は東宮太子＝太子賓客である匡衡自身についての言及ではないが、四皓の故事を挙げるのは「太子賓客」からの連想であろう。その意味で、匡衡は唐名「太子賓客」の中国における理解した上で詩序を作成していると言ってよい。

しかしながら、平安朝の人々が「太子賓客」の語から連想するものは、おそらく東宮学士や商山の四皓ではなかった。

平安朝漢詩文における「太子賓客」の用例を探すと、前述の匡衡の東宮学士の唐名としての二例以外に次に挙げる四例がある。これらはすべて白居易を指している。

⑭　晋建威将軍劉伯倫嗜酒　作酒徳頌伝於世
唐太子賓客白楽天亦嗜酒　作酒功讃以継之
（「酒功賛序」白居易『和漢朗詠集』巻下　酒）

⑮　晋騎兵参軍王子猷、種而称此君、唐太子賓客白楽天、愛而為我友

「冬夜守庚申同賦修竹冬青」藤原篤茂
（『本朝文粋』巻十一）

⑯ 是以吏部停盃　詠唐太子賓客白楽天之於慈恩寺所作
紫藤花落鳥関関句　即命座客各賦其心
「三月尽日遊五覚院同賦紫藤花落鳥関関」源順
（『本朝文粋』巻十一）

⑰ 左相府者王佐之重器也　興立礼楽之中衰　彌縫文章
之殆絶
詢四方而居露才　開漢公孫丞相之東閤
携三友而賞風景　写唐太子賓客之北窓
「七言暮秋陪左相府書閣同賦寒花為客栽」
（『江吏部集』巻下・『本朝文粋』巻十一）

⑭は『和漢朗詠集』下巻に収められた、白居易の「酒功賛序」の冒頭部分である。白居易は、唐の大和三年（八二九）、五八歳で太子賓客となり洛陽に分司した。「酒功賛并序」はそのころの作品で、ここで白居易は「酒徳頌」を作った晉の劉伶と並ぶ者として自らを「唐太子賓客白楽天」と称するのである。

⑮以下三例は本朝の例である。⑮の藤原篤茂の詩序では「晉騎兵参軍…、唐太子賓客…」という対句の形式から⑭の「酒功賛序」の直接的な影響を受けていることは明らかである。⑯の源順の詩序は白居易の「酬元員外三月三十日慈恩寺相憶見寄」（『白氏文集』九九〇[注8]）中の「紫藤花落鳥関関」を句題としたものであるが[注9]、この詩は白居易が江州司馬として左遷されていた元和十二年（八一七）の作であり、当然の事ながら太子賓客とは無関係である。しかし、それでも「唐太子賓客白楽天の慈恩寺に作る所の」と述べるのは「唐太子賓客」が白居易の代名詞として受け取られていたからではないか。それは⑰の匡衡の詩序にもっとも顕著である。ここでは白楽天の名は出ていないが、「唐太子賓客の北窓」の語は、平安朝文人の間で有名だった「北窓三友」詩（『白氏文集』二九八五）をふまえたものであり、太子賓客は白居易を意味している。

したがって、平安朝漢詩文において「太子賓客」の語を用いた場合、それが東宮学士の唐名としての使用だとしても、読むものに白居易を連想させたことは想像に難くない。匡衡も当然それを意図して用いたのであろう。

四

いったい、東宮学士という職と白居易という人物は、大江家、特に大江匡衡にとっては特別な存在であった。

匡衡が生涯にわたって、帝師となり、それによって卿相の位に昇ることを望んでいたことは先学によって詳細に論じられているところである。[注19] 帝師となること、それは、匡衡の元服時の祖父維時卿の言葉から始まった。

⑱　十三加元服　祖父在其筵　提耳殷勤誡　努力可攻堅
我以稽古力　早備公卿員　汝有帝師体　必遇文王田
……四十六学士　龍楼景気妍　四十七四品
職主衡与銓　其年秋九月……後未幾日　昇殿接神仙
近左右師子　攀楼殿環玭　執巻授明主　縦容冕旒褰
尚書十三巻　老子亦五千　文選六十巻　毛詩三百篇
加以孫羅注　加以鄭之箋　捜史記滞義　追謝司馬遷
叩文集疑門　仰慙白楽天……

「述懐　古調詩　一百韻」（『江吏部集』巻中）

祖父維時がそうであったように、天皇の師となる相のある匡衡は、努力すれば必ず天皇から引き立てられるだろう、「述懐　古調詩　一百韻」は匡衡五十六歳の作だが、少年の日の記憶がはっきりと記されている。それから三十年あまり経って四十六歳で東宮学士となったとき、匡衡は祖父の言葉が実現したかのように感じたであろう。「龍楼の景気に妍（な）る」の句には匡衡の得意が現れている。翌年には、一条天皇の侍読にもなっている。

そのように考えれば、先に挙げた②で、末尾自謙句であるにも関わらず、「太子賓客たるを以て敬師の初筵に列なり、翰林学士たるを以て崇学の盛事を記す」と自尊といってよいくらい誇らしげに自らの職を名乗っていることも理解できよう。この時匡衡は東宮学士補任から三年後の四十九歳、東宮学士、文章博士、式部権大輔と、儒者の要職三官を兼帯していた。祖父が語った、「稽古の力を以て」「公卿の員に備ふ」ことが手の届くところまで近づいたと感じられたのである。

祖父維時もまた東宮学士であったことが匡衡に強く印象づけられていたことは、先に見た⑪詩の自注からも伺える。寛弘二年（一〇〇五）の一条天皇第一皇子敦康親王の読書始において、匡衡は祖父が延喜の帝（醍醐天皇）の侍読であり、同時に東宮成明親王の東宮学士であったこと、と同時に第十一皇子寛明親王にも学問を授けたことに思いを馳せ、それは

中国でも日本でも比べるもののない功績であったと述べるのである。これは現在の東宮学士である自身を祖父と並べ、帝師たることが大江家の伝統であることを確認するものであった。

家の伝統といえば、白居易と彼の『白氏文集』もまた大江家につながるものである。⑱の「述懐　古調詩　一百韻」では、四十七歳の秋に一条天皇から召された後、侍読として多くの漢籍を教授したことが述べられ、その中には『白氏文集』も含まれている。

⑲　近日蒙綸命点文集七十巻。夫江家之為江家白楽天之恩也。故何者。
延喜聖代千古維時父子共為文集之侍読。天暦聖代維時斉光父子共為文集之侍読。
天禄御寓斉光定基父子共為文集之侍読。爰当今盛興延喜天暦之故事。
匡衡独為文集之侍読。挙周未遇昇。欲罷不能以詩慰意。
研朱仰鳳点文集　汗竹割鶏居武城
若用父功応賞子　老栄欲擬昔桓栄
（『江吏部集』巻中）

⑲詩において、匡衡は勅により『白氏文集』七十巻に加点し一条天皇に講じることになったと言い、曾祖父千古から四代にわたって醍醐・村上・円融の三代の天皇に『白氏文集』を講じてきた伝統を述べる。そして「江家の江家たるは白楽天の恩なり」とまで言い切るのである。

このように考えると、匡衡にとって「太子賓客」という語が単なる東宮学士の唐名というだけのものではなかったことは自明であろう。それは、将来の帝師を保障する東宮学士と大江家の伝統を支える白居易の両方を意味する語であったのである。そう考えると、匡衡が唐名「太子賓客」を自分以外に使用しなかったことは決して偶然ではない。

五

さて、では白居易自身にとって「太子賓客」はどのような意味を持っていたのだろうか。

白居易が太子賓客の職を拝するのは唐大和三年、五十八歳の時である。しかも洛陽での分司の職で、実際の職務は無いに等しく、名誉職的な閑職であった。いわば政界引退も同然の状況といってよい。以下に『白氏文集』から詩題に「太子

賓客」乃至「分司」の語が使われている詩文をいくつか挙げる。

⑳

授太子賓客帰洛　〔自此後東都作〕　（大和三・洛陽）

南省去払衣　東都来掩扉　病将老斉至　心与身同帰
白首外緑少　紅塵前事非　懐哉紫芝叟　千載心相依

（『白氏文集』二二七四）

㉑

病免後喜除賓客　（大和三・長安）

臥在漳浜満十旬　起為商皓伴三人　従今且莫嫌身病
不病何由索得身

（『白氏文集』二七一八）

㉒

分司初到洛中偶題六韻兼戯呈馮尹　（大和三・洛陽）

相府念多病　春宮容不才　官銜依口得　俸禄逐身来
白首林園在　紅塵車馬迴　招呼新客旅　掃掠旧池台
小舫宜攜楽　不知金谷主　早晩賀筵開

（『白氏文集』二八一一）

㉓

自賓客遷太子少傅分司　（大和九・洛陽）

頭上漸無髪　耳間新有毫　形容逐日老　官秩随年高
優饒又加俸　閑穏仍分曹　飲食免藜藿　居処非蓬蒿
何言家尚貧　銀榼提緑醪　勿謂身未貴　金章照紫袍
誠合知止足　豈宜更貪饕　黙然心自問　於国有何労

（『白氏文集』三〇三一）

㉔

韋七自太子賓客再除秘書監以長句賀而餞之　（大和九・洛陽）

離筵莫愴且同歓　共賀新恩拝旧官　屈就商山伴麋鹿
好帰芸閣狎鵷鸞　落星石上蒼苔古　画鶴庁前白露寒
老監姓名題在壁　相思試為払塵看

（『白氏文集』三二二六）

㉕

池上扁并序

大和三年夏、楽天始得請為太子賓客、分秩於洛下、息躬於池上。凡三任所得、四人所与、洎吾不才身、今率為池中者矣。毎至池風春、池月秋、水香蓮開之旦、露清鶴唳之夕、払楊石、挙陳酒、援崔琴、弾姜《秋思》、頹然自適、不知其他。

（『白氏文集』二九二八）

傍線部からは、白居易は老いと病に悩まされながらも、太子賓客の俸禄や身分に満足し、紅塵すなわち世俗の雑務に煩わされない隠遁者としての境遇に満足しているように見える。しかし、それは心からの自適の境地とは言い難いところがある。㉔の詩題の「太子賓客」は白居易自身のそれではなく、友人の韋七の職であり、彼が太子賓客分司から秘書監に除され再び朝廷の中枢に戻ることを祝福した作である。ここで白居易は太子賓客であったことを「屈して商山に就きて麋鹿を伴とす」と言い、山中に隠居する不本意なものであることを表明している。これは都に栄転する友人に贈る言葉であるからこれまでの境遇を卑下するのはある程度儀礼的なことかもしれない。しかし、尾聯で「老監」すなわち白居易の姓名が秘書省の壁に残っているはずだから塵を払って見てほしいというのは、白居易自身の都での顕職に対する未練である。

平安朝の文人たちよく知られた㉕の「池上篇」には、太子賓客として洛陽の邸宅の池のほとりで酒と琴を友として泰然自適の生活を楽しむ白居易の姿が描かれるが、『白氏文集』七十巻に加点し、一条天皇の文集侍読を勤めた匡衡は、「太子賓客」白居易のある種屈折した心境を理解していたであろう。

ここでもう一度、本稿冒頭の詩序に立ち戻ってみたい。長保二年には式部権大輔と文章博士、東宮学士の三官を兼任し、翌長保三年には尾張守の職も加わり殿上人にして図書寮別当と一身に六事を兼ねることを誇っていた匡衡も、その後次々と任を終え五年後の寛弘四年には、東宮学士を残すのみとなっていた。東宮学士は大江家の家風を嗣ぐ職とはいっても、一般的には決して顕職ではない。匡衡にしてみれば、五年前には公卿の一員となる参議補任または従三位昇進は目前と期待もしていたであろうが、今となってはそれはいよいよ遠ざかっていくような不安に取って代わっていたであろう。

「位は纔かに正議大夫」の句は三位に昇れない匡衡の不遇感を端的に表している。

それに対して「太子賓客」の語が先述のように、匡衡にとって大江家の伝統を意味するものであったならば、「職は只だ太子賓客」の句は匡衡の自尊心を表すと同時に、「太子賓客」白楽天の屈折した心境を理解した上で彼に自己を投影したものであろう。

匡衡の唐名「太子賓客」の用法は、匡衡独特の白居易受容の一面であった。

注

注1　『日本紀略』寛弘四年三月三日条

注2　『拾芥抄』「官位唐名部」によれば正議大夫は正四位上をいうが、本来の用法をはずれて、「正議大夫」を正四位下に用いたことについては、黒坂伸夫「史料寸見二題」（『平安王朝の宮廷社会』吉川弘文館）に詳しい。

注3　『二中歴』は『改定 史籍集覧』第二十三冊、『拾芥抄』は『大東急記念文庫 善本叢書 中古中世篇 類書Ⅱ』による。本稿で使用した索引、データベースは以下の通り。

注4　『平安朝漢詩文総合索引』吉川弘文館
『本朝文粋漢字索引』おうふう
『菅家文草・後集索引』明治書院
『凌雲集索引』和泉書院
『文華秀麗集索引』和泉書院
『田氏家集索引』和泉書院
『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』和泉書院
『扶桑集　校本と索引』櫂歌書房
『本朝麗藻索引』勉誠社（現勉誠出版）
『本朝無題詩全注釈』新典社
東京大学史料編纂所データベース

注5　「中古歌仙三十六人伝」による。

注6　『二中歴』第二「儒職歴」学士侍読による。

注7　『経国集』に「春宮学士」の例があるが、唐名の意識があるかどうかは不明。

注8　『白氏文集』の作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』の「作品表」による。

注9　那波本を含む現行の『白氏文集』では「紫桐花落鳥関関」に作る。

注10　大曽根章介「大江匡衡」『日本漢文論集』第二巻　汲古書院
後藤昭雄「大江匡衡　卿相を夢みた人」『平安朝文人志』吉川弘文館
後藤昭雄『人物叢書　大江匡衡』

付記　本稿は、二〇〇四年に九州大学で九州大学21世紀ＣＯＥプログラム（人文科学）「東アジアと日本：交流と変容」と共催で行われた和漢比較文学会第二十三回大会 での発表「職は只太子賓客 ― 大江匡衡と白楽天 ―」に基づいている。原稿をまとめるのに六年も放置してしまったことを恥じるとともに、発表後、質問、助言をいただいた先生方に改めて感謝申し上げる。

（きど　ゆうこ・鹿児島県立短期大学）